Survey of Materials for Naniwa odori (浪花踊) : Satos'Naniwa odori (浪花踊) Banzuke (番付) from the Seventh Performance to the Fifteenth Performance

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2017-10-03 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/2297/41272

人間社会環境研究　第29号　2015. 3

浪花踊に関する史料調査
― 佐藤家伝来の浪花踊番付（第七回～第十五回）―

人間社会環境研究科　客員研究員
笠　井　津加佐
佐　藤　　恵

要旨

本稿は，佐藤家に残された，浪花踊番付に関する紀要28号からの継続調査である。今回は，第七回浪花踊から第十五回浪花踊の番付を掲載するほか，番付全体の内容に関する表を作成し，その様式が定着する様が捉えられるようにした。その結果，今回掲載した部分は，浪花踊の番付が，大きさ，形，頁数といった外見上の体裁が整い，内容として含まれる歌詞や場面説明，出演者番組などの内容もその記述の仕方が整う時期であることが明らかになった。そのことから，浪花踊そのものの大阪地方における定着も安定したことが推測される。

また，この時期は，日本が大正から昭和初期にかけての平和な安定した時期であり，明治以降西洋から流入した文化が成熟し，舞踊界では，浪花踊との関係が深い花柳流でも，大正13（1924）年に，新しい舞踊を求めて花柳舞踊研究会が設立されている。番付史料によれば，浪花踊でも，舞台美術の田中良や二代目花柳壽輔との交流が始まっており，興味深い時期であることが確認された。

キーワード

浪花踊（北ノ新地），花柳舞踊研究会，田中良

Survey of Materials for *Naniwa odori*（浪花踊）
－Satos' *Naniwa odori*（浪花踊）*Banzuke*（番付）from the Seventh Performance to the Fifteenth Performance－

Guest researcher Graduate School of Human and Socio-Environmental Studies
KASAI Tsukasa
SATO Megumi

Abstract

This paper is a continuation of the study from Bulletin No. 28 on *Naniwa Odori*（浪花踊）*Banzuke*（番付），owned by the Sato family. The photo and the table from the contents of *Banzuke*（from 10 in Taisho［1921］to 4 in Showa［1929］）are presented in this paper. The table provides an overview of the contents of the paper, as well as a notation that the style of *Naniwa Odori Banzuke* is fixed. As a result, it was a time when *Banzuke* was standardized. This standardization included

the appearance, size, shape and volume, as well as the contents of the performance: the performer's program, scene information, and lyrics. Hence, it seems that *Naniwa Odori* was an established art form in Osaka society at that time.

During this time, Japan was in a stable and peaceful period of early Showa from Taisho. Culture flowed from the West after the Meiji era had matured. In the Japanese dance field, the Hanayagi School established *Hanayagibuyokenkyukai* (花柳舞踊研究会) on 13 in Taisho (1924), seeking a new dance form. *Banzuke* materials confirmed that it was a period of change, when *Naniwa Odori* began the exchanges with the 2nd Hanayagi Jusuke (二代目花柳壽輔) and set designer Tanaka Ryo (田中良).

Keywords

Naniwa odori (Kita-no-shinchi), *Hanayagibuyokenkyukai* (花柳舞踊研究会), Tanaka Ryo (田中良)

はじめに

本稿は,『人間社会環境研究』28号に掲載した佐藤家に残された浪花踊番付に関する継続報告である。前回の報告以降,佐藤により第一回浪花踊の愛蔵版番付が追加されている。佐藤家では,浪花踊に関する史料を恵の母・笑子が保存してきたが,彼女の加齢によりその全体が確認できなかった。そのため本報告以降も,僅かであると思われるが,追加史料が出現することが予想される。随時,総数を訂正することをお許しいただきたい。

なお,本稿は,2章を笠井と佐藤で作成し,その他は笠井が執筆した。

1. 簡易版番付から窺われる浪花踊の変遷

本稿では,簡易版番付の構成に関する現時点での分析と,浪花踊の一面に関する管見を纏める。これらは今回紹介する番付史料も含めて,番付史料全体に関するものである。まず,付表1として掲載した文末の表1をご覧いただきたい。これは,番付史料全体の内容に関して纏めた表である。

28号で掲載した第一回から第六回までの番付史料と今回掲載する史料は,まず外形上大きく異なっている。28号掲載分の番付資料は,番付の大きさや形(横長本と真四角本が混在)が様々であった。さらに,その頁数も多いものは表紙,裏表紙を含めて36頁のものから,少ないものは14頁のものまであった。

番付中,総頁数36頁で極めて多い第一回番付は,配役の番組について公演日ごとに総てを掲載しているからであった。二回目からは,公演期間中,同じ配役で番組の組み合わせを概ね5組作り,記載を纏めたため頁数が大幅に減っているが,その後も頁数には異同が見られる。編成は,最初4組編成で始まり,その後第五回目で一旦5組で定着したのち,昭和5年と10年に,4組編成の例外が見られる。例外に関しては作品との関係であるのか,配役を勤める芸妓の関係であるのか,現時点ではまだ言及できない。

そのほか番付には,衣装説明や場面解説が記載され,広告が掲載されているものもあった。後半には抹茶手前の番組も記載されている。これら衣装説明,場面解説が,八回目以降は見られず,併せて愛蔵版に詳細な説明記述が見られることから,簡易番付の役目は番組表であったと推測できる。八回目までの衣装説明や場面解説は,明治23年からの中断を経て復活公演した北の新地「浪花踊」のイメージ作りや近隣の花街でも行われていた踊りに対抗するために,愛蔵版での記載が相応しいものを,宣伝のために特別挿入しているので

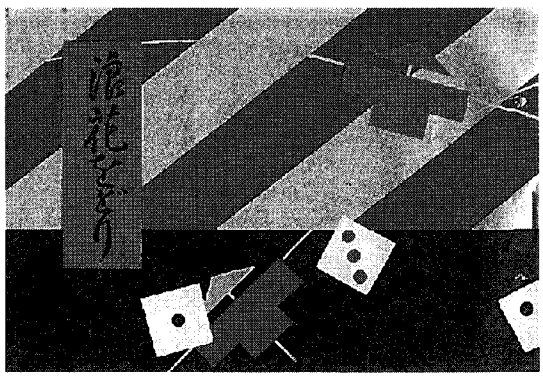
はなかろうか。第一回目にはそれらの記事が掲載されていないこと，第二回目から，北陽が最も力を入れたと考えられる衣装の写真が挿入され，第三回目からはその説明が付加されていること，さらにその後，第四回目から舞台に関する説明が付加されていることも，復活公演当初の知名度やその対策を，物語ってはいないだろうか。併せてこれらの説明は，第九回目以降は見られない。

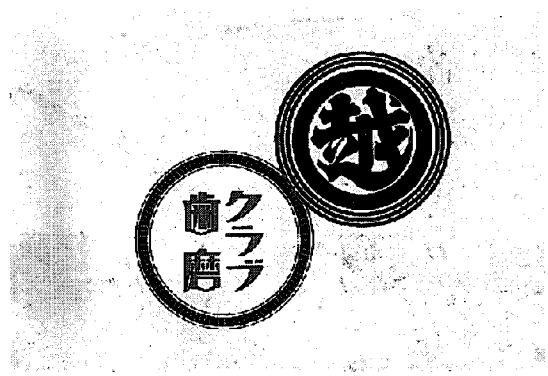
また同時期，裏表紙以外，広告頁が見られなくなっている。広告頁は，第廿回から再び現れるが，衣装と場面の説明が簡易版番付に再度見られることはない。このことは，演舞場利用案内が広告頁の復活の時期と期を同じくしていることとも関係があるかもしれない。演舞場利用案内が最初に番付へ記載されたのは昭和７年であり，日本が徐々に戦時下に向かう頃であることを考え合わせると，劇場経営が困難になってきたことのこれは徴証かもしれない。

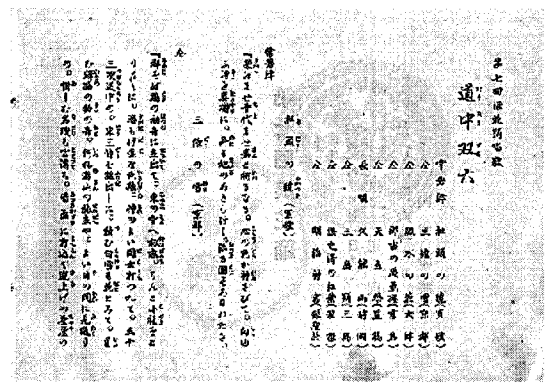
最後に，昭和６年から始まった，抹茶手前番組の記述は，それ以前に抹茶席がなかったと考えるよりも，一つの役割が与えられたと考える方が良いのではなかろうか。即ち，芸妓が，サービスの一環として，特等客へ抹茶を呈していたものが，浪花踊のショーの一部とでもいおうか，単なるもてなしの一部から浪花踊における一つの役目ができたと筆者は考えている。ただ，第十九回，第廿二回に番組表が見られない。これは，番付の紙数の関係で省略したのか，また，何らかの事情で呈茶席が設けられなかったかであろうが，現在ではまだその理由を特定できない。

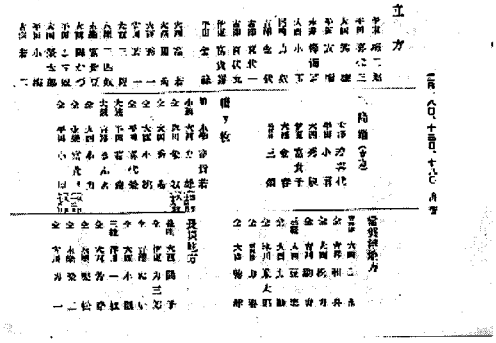
２．番付史料紹介（第七回から第十五回まで）

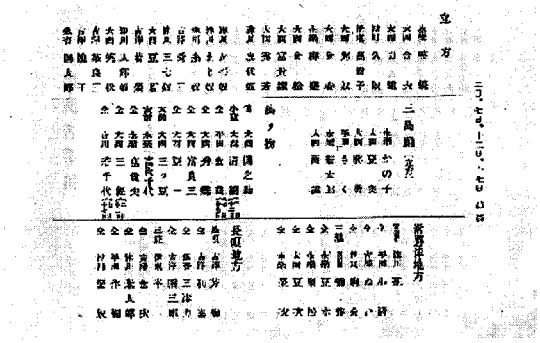
第七回

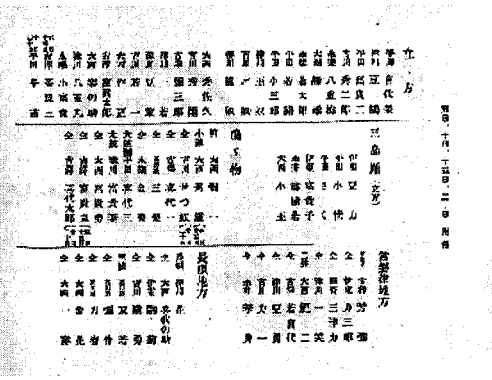


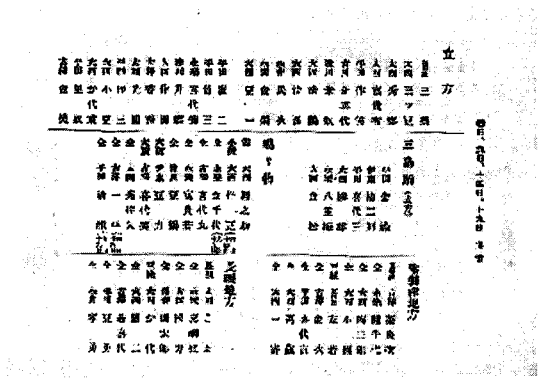


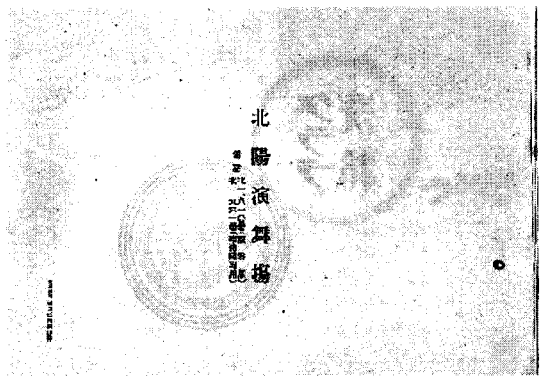


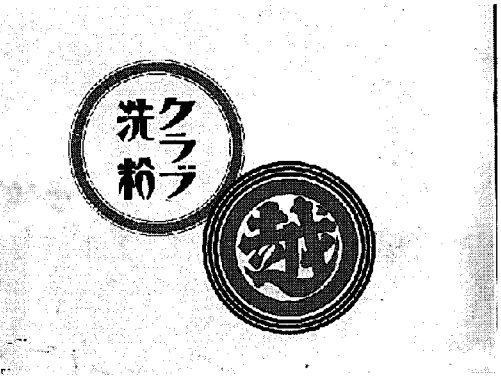


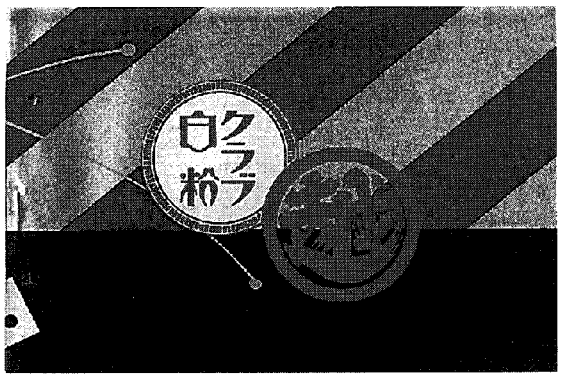




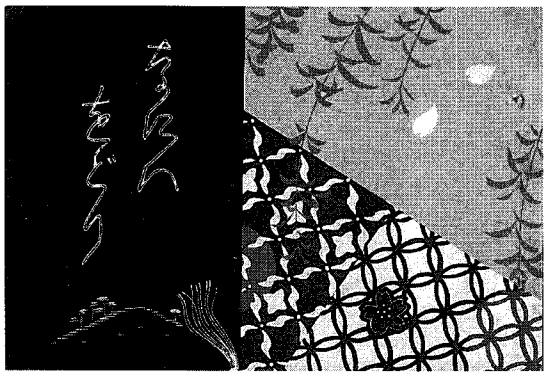


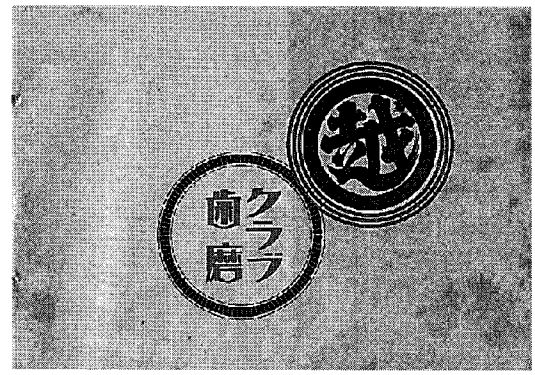

北陽演舞場

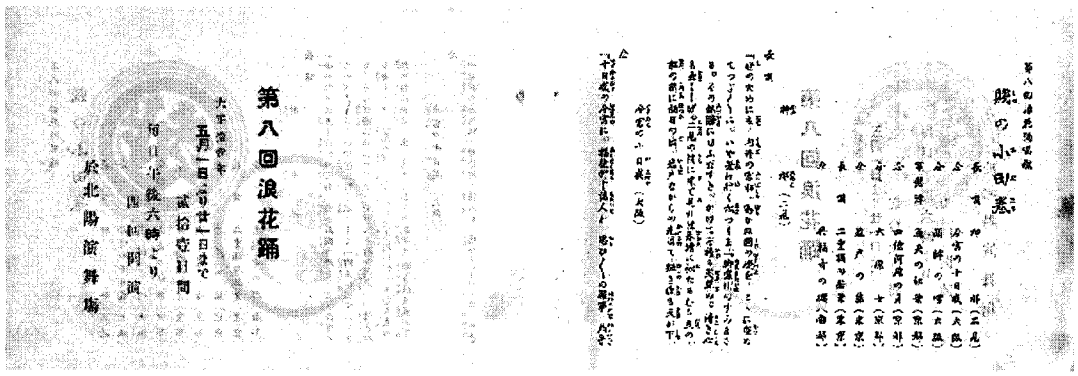

クラブ
洗粉


クラブ
白粉

第八回







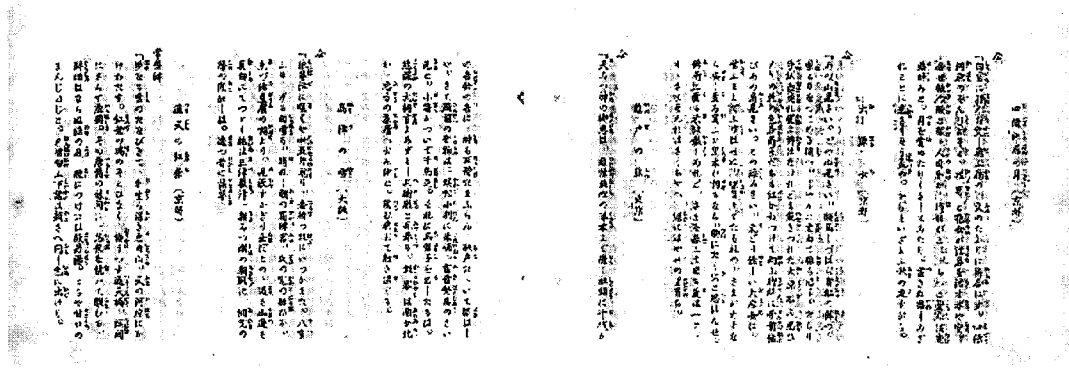
第八回浪花踊

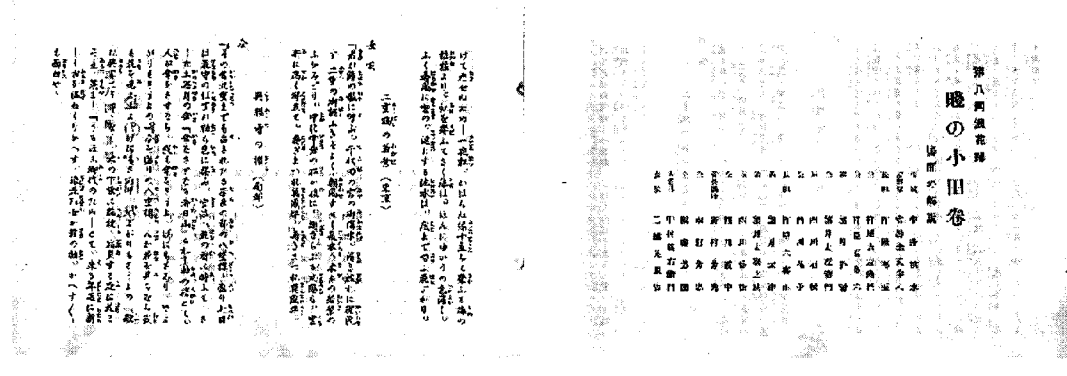
曉の小田巻

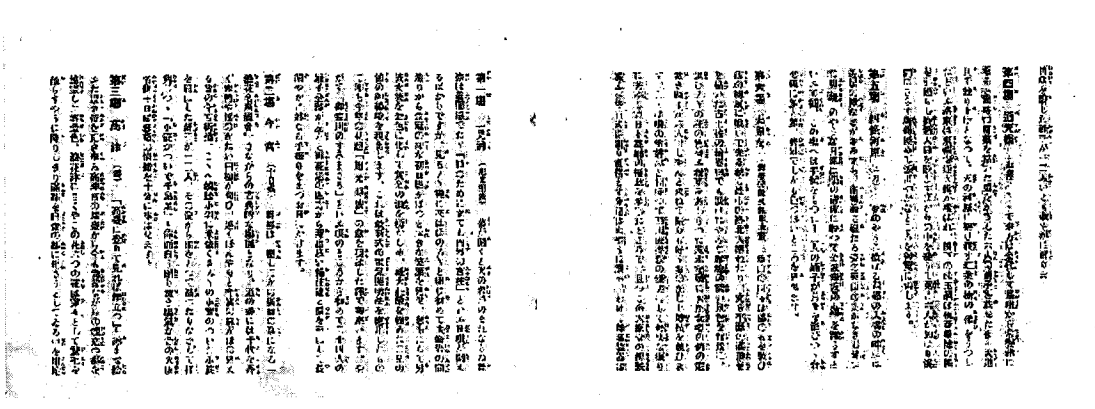
第八回浪花踊

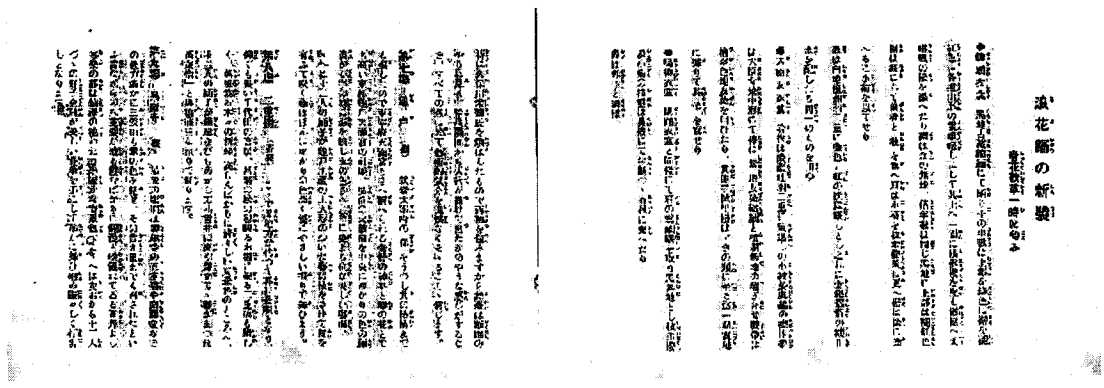
第八回浪花踊

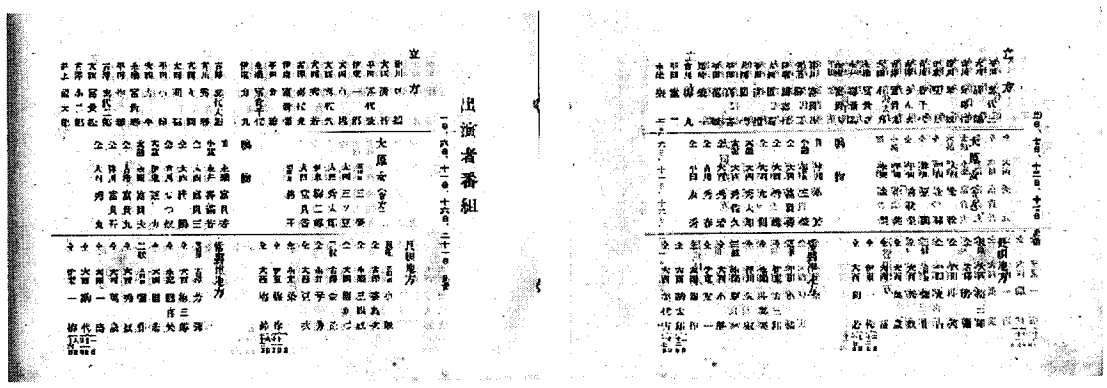
曉の小田巻

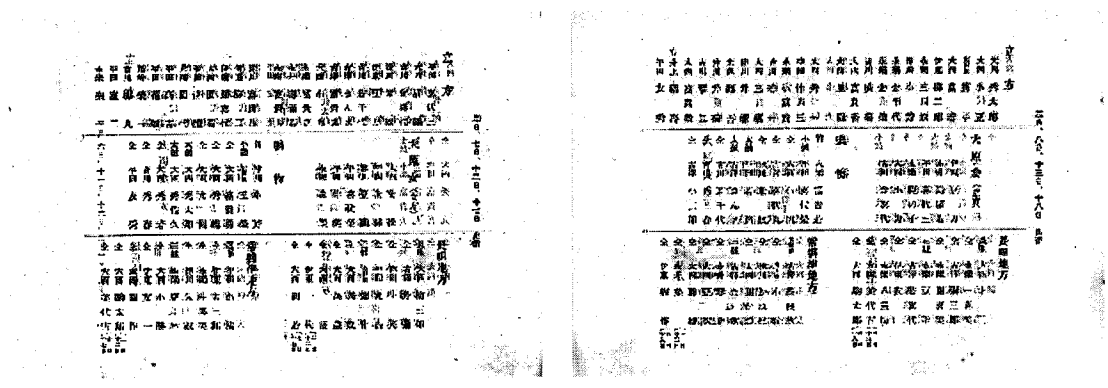


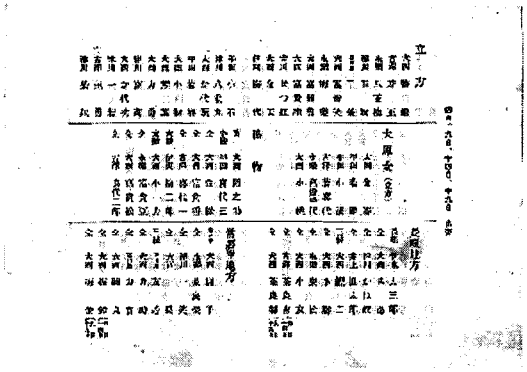


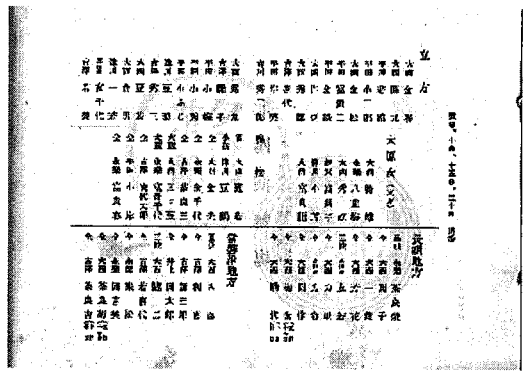


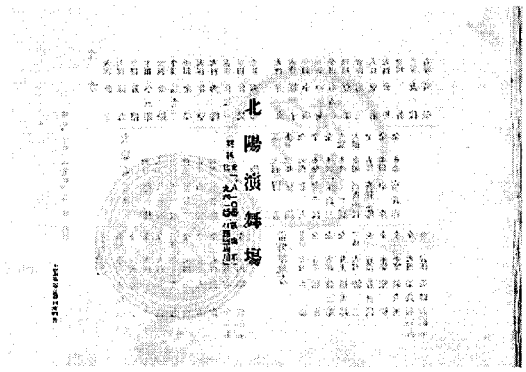


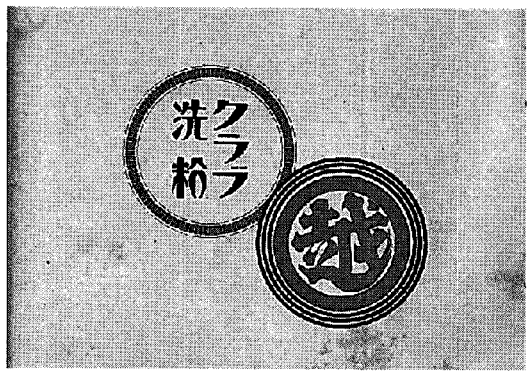


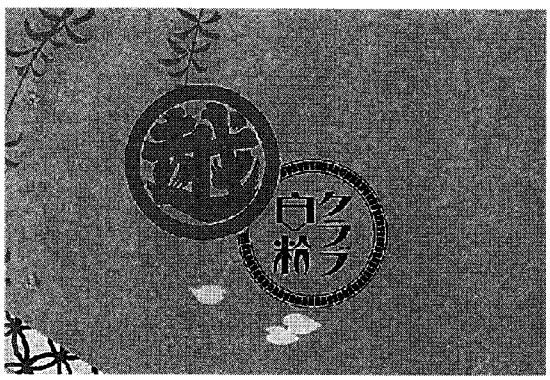




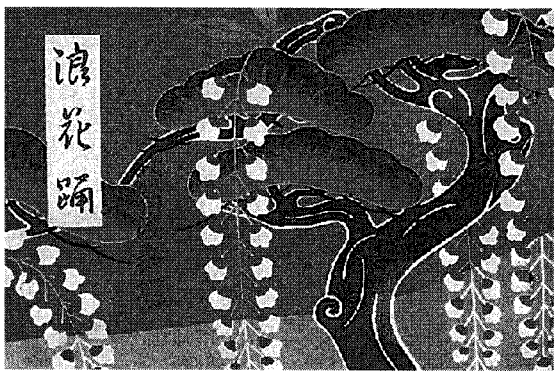


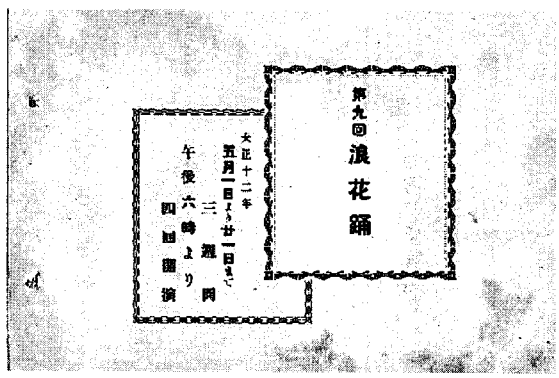

北陽演舞場

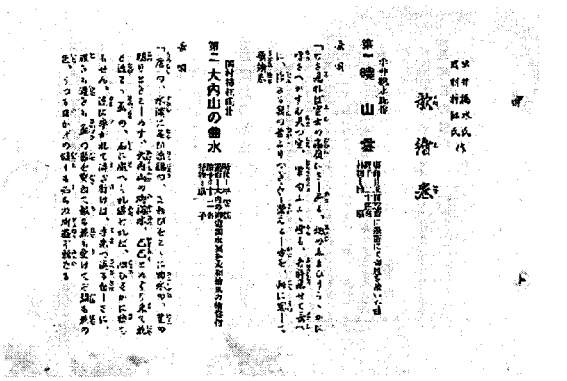

クラブ洗粉

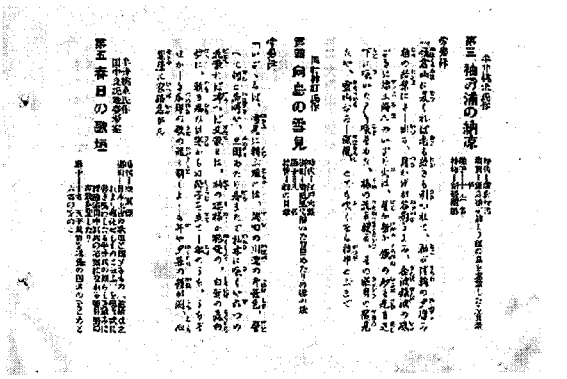

クラブ白粉

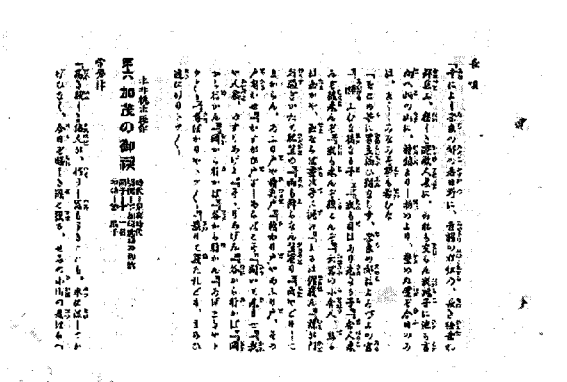
第九回

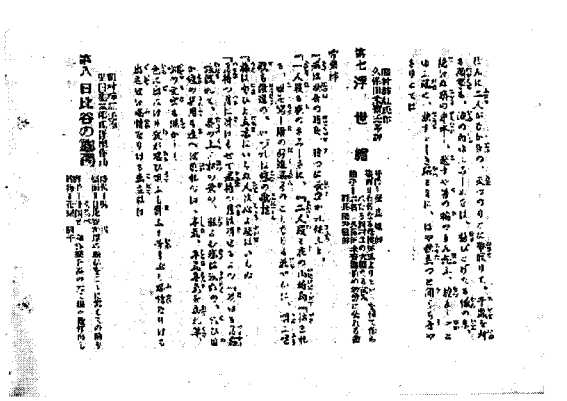

浪花踊

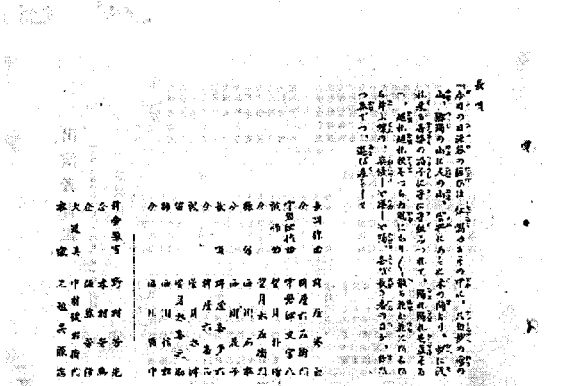

第九回浪花踊
大正十二年
五月一日より廿一日まで
三週間
午後六時より
四回開演

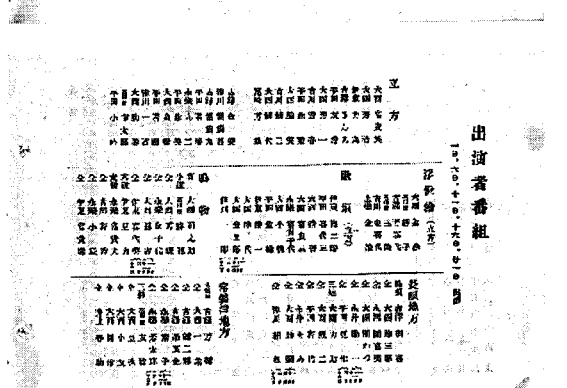


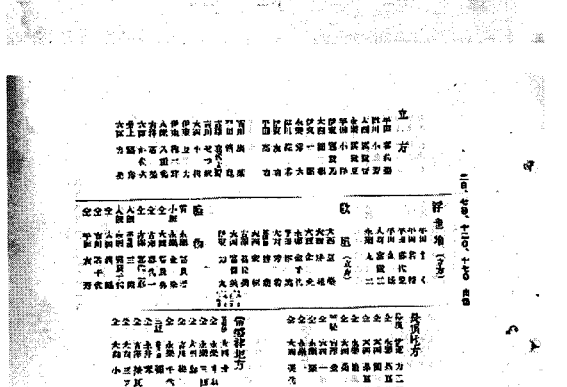


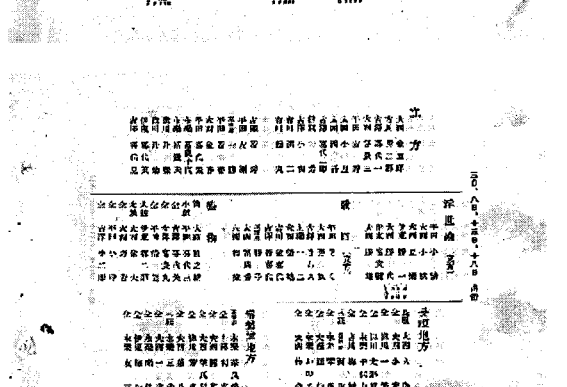


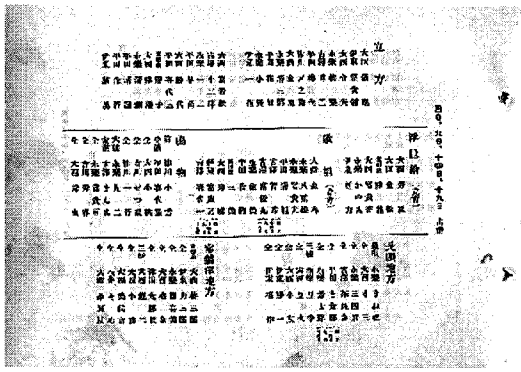


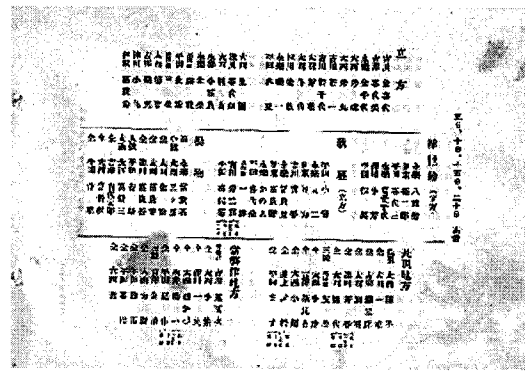


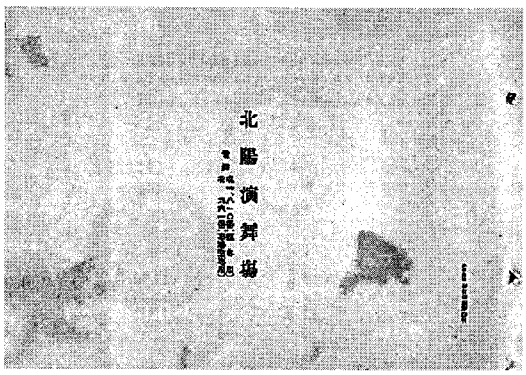


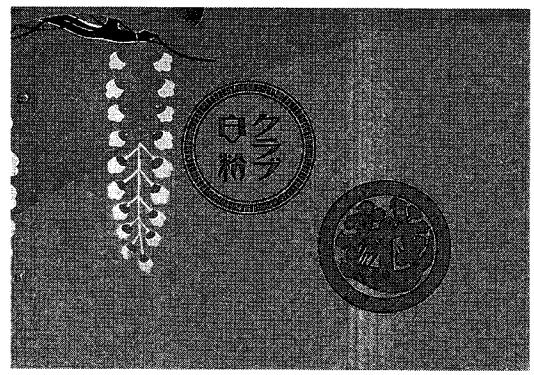




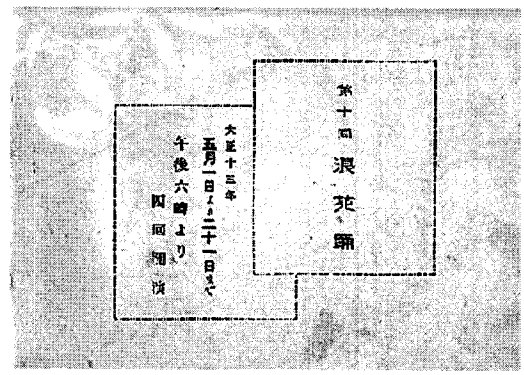


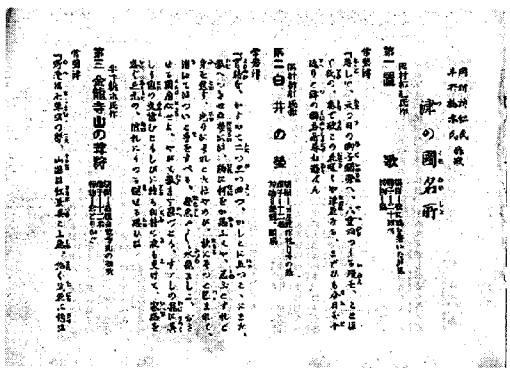


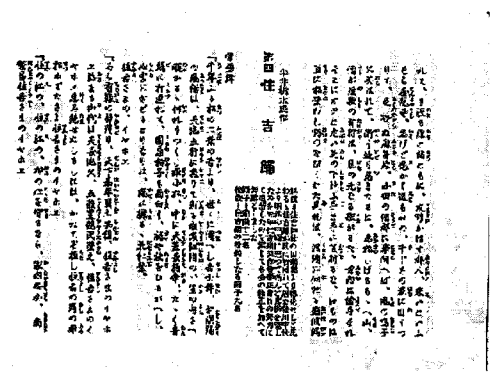


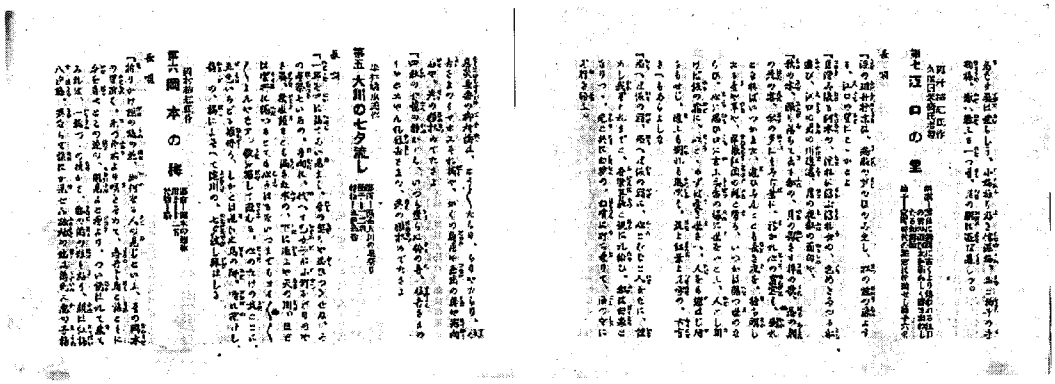


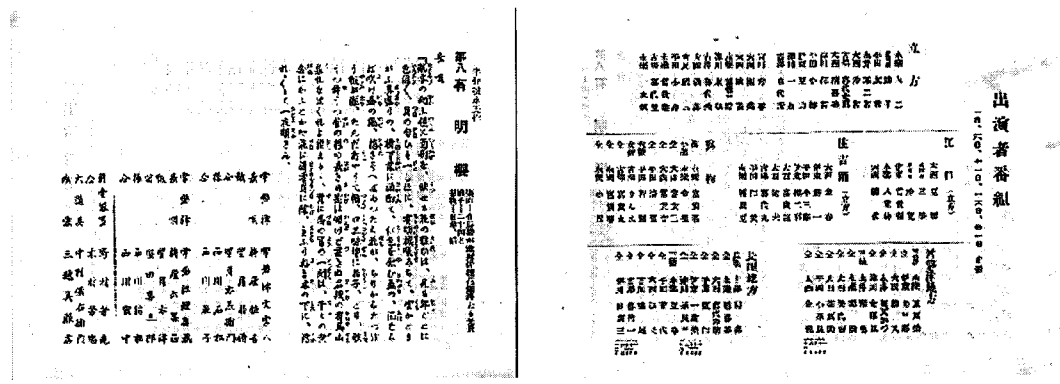
第十回

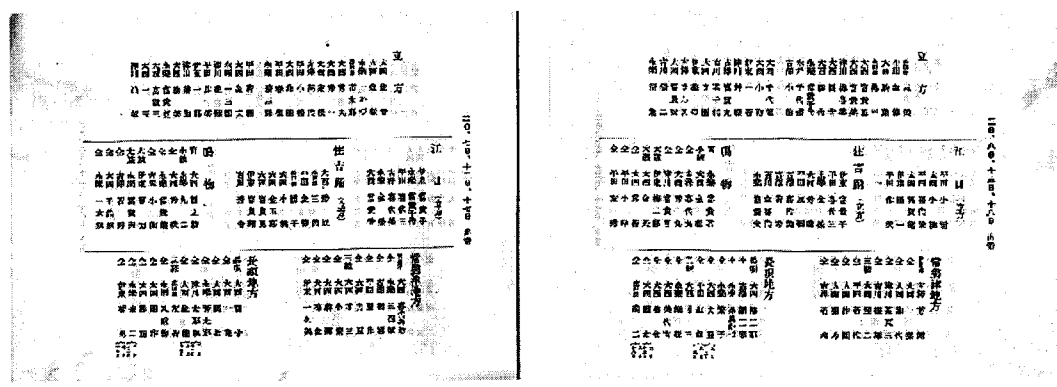


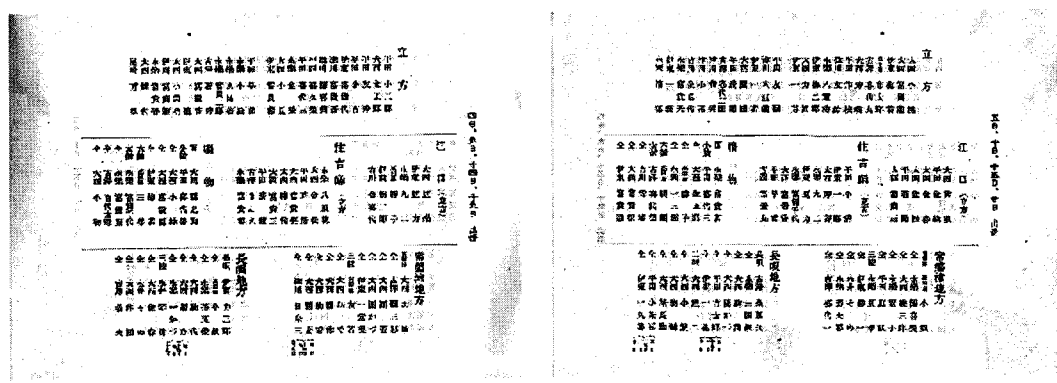


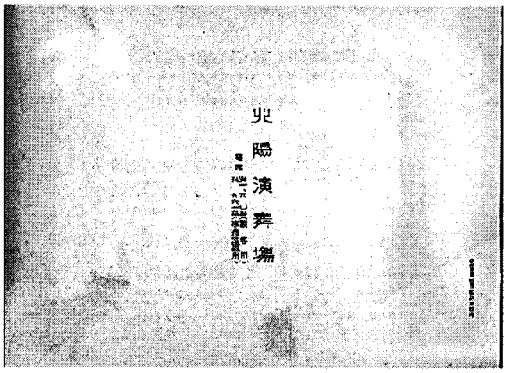


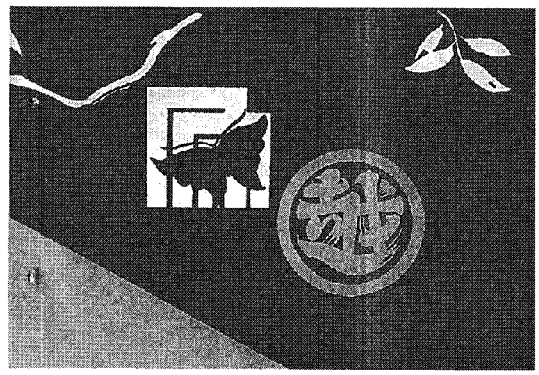




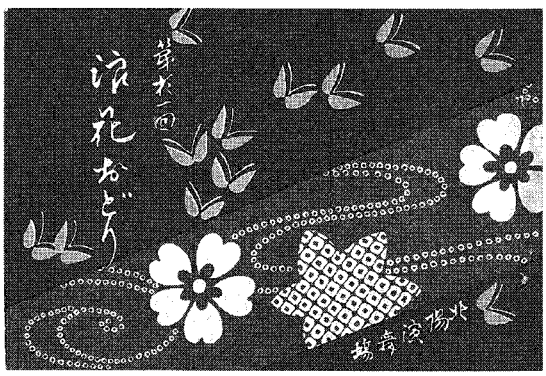


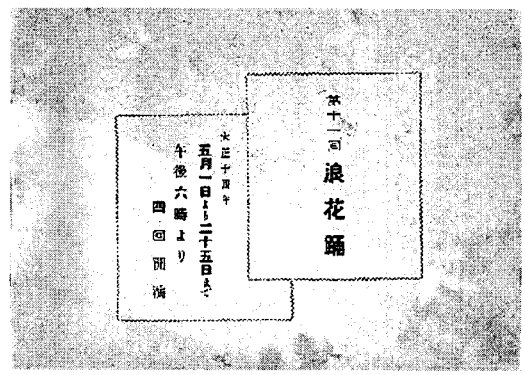


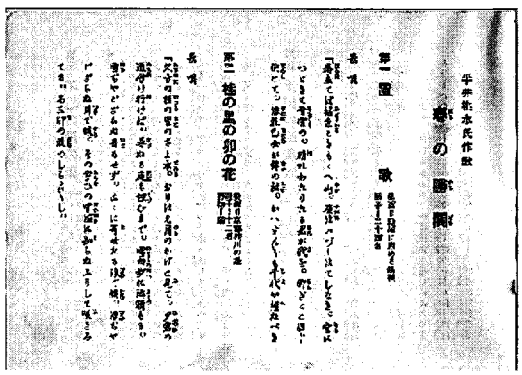

兒
場演舞場

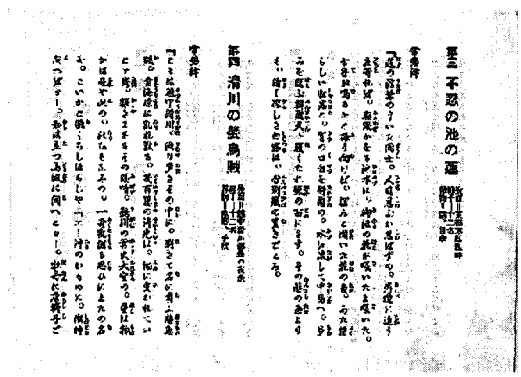


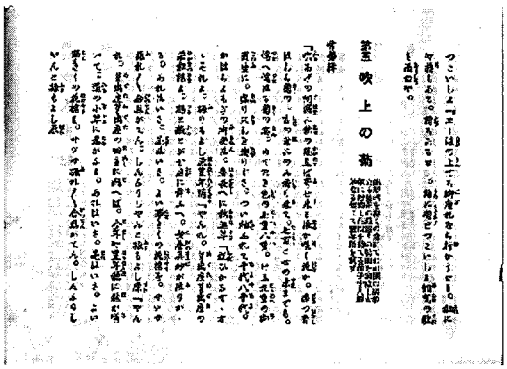
第十一回

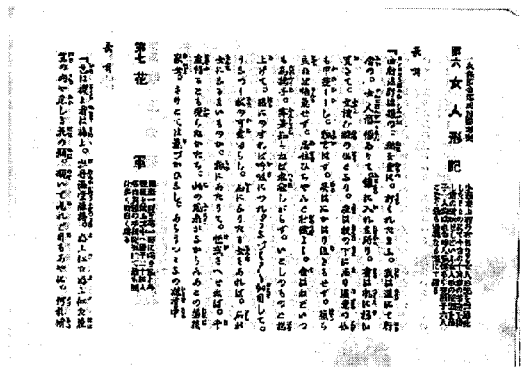

第十一回
浪花おどり
水場演舞場

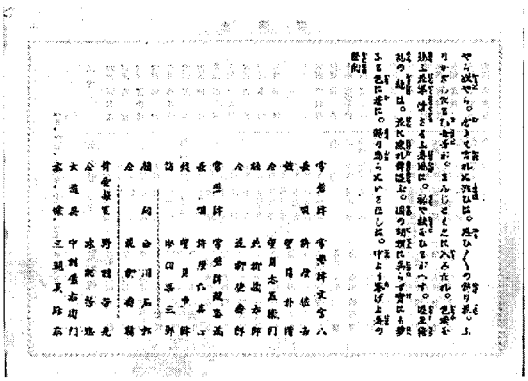

第十一回 浪花踊
大正十四年
五月一日より二十五日まで
午後六時より
四回開演

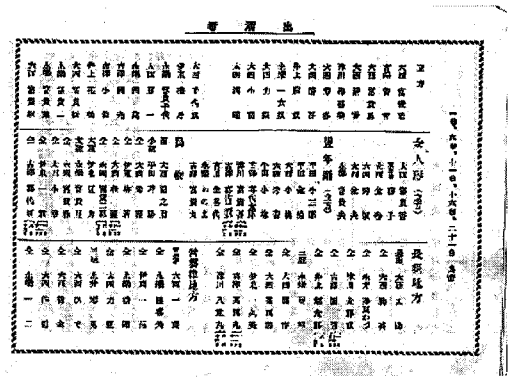

第一回　歌の園
第二回　桂の黒の卵の花
第三　不忍の池の蓮
第四　淀川の蛍鳥

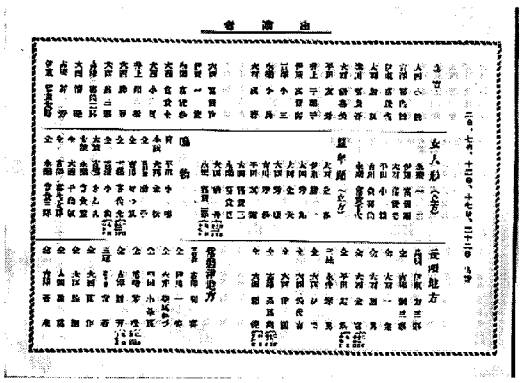


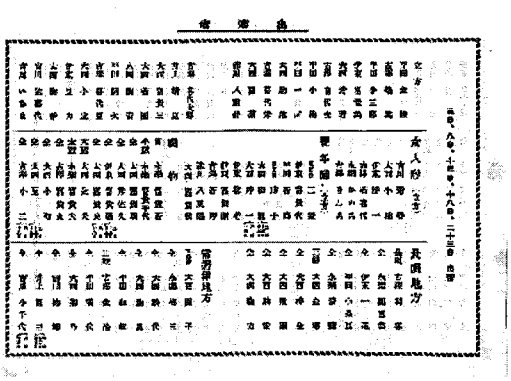

第五　吹上の菊
第六　女人形記

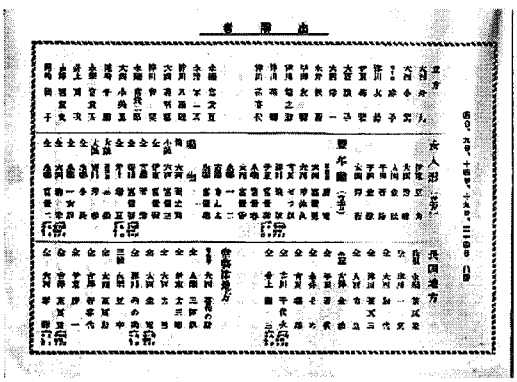

第七　花軍

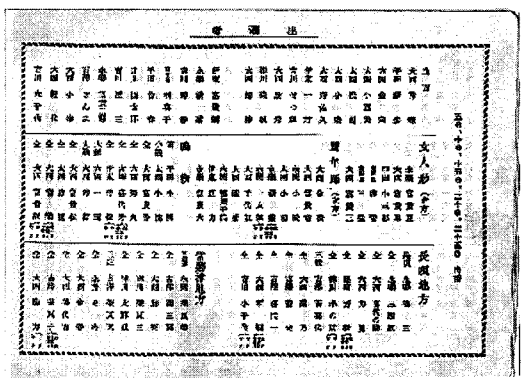


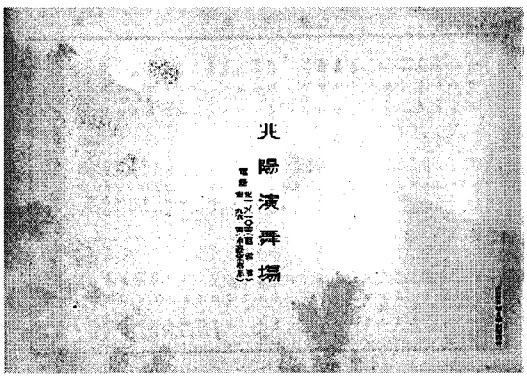


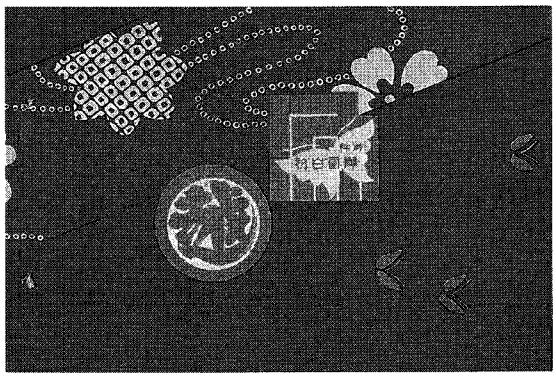




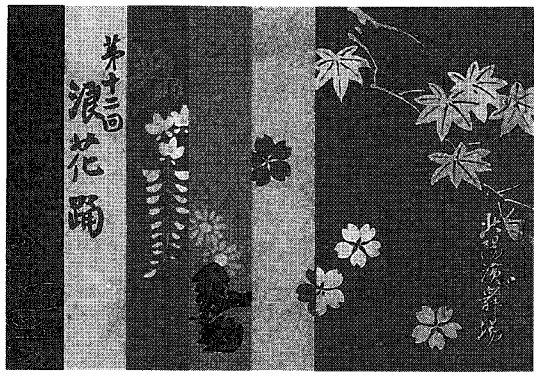


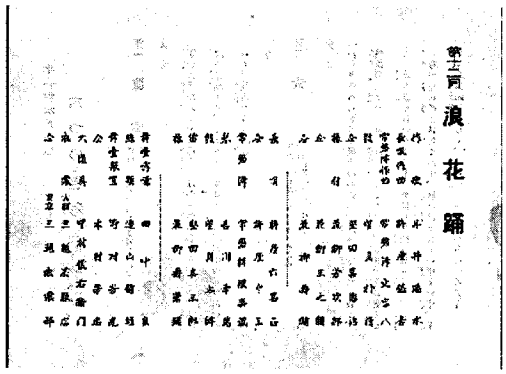


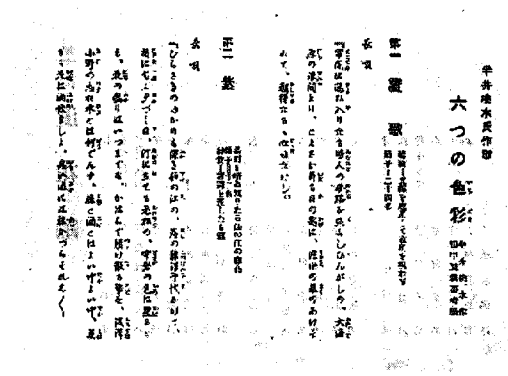

兆陽演舞場

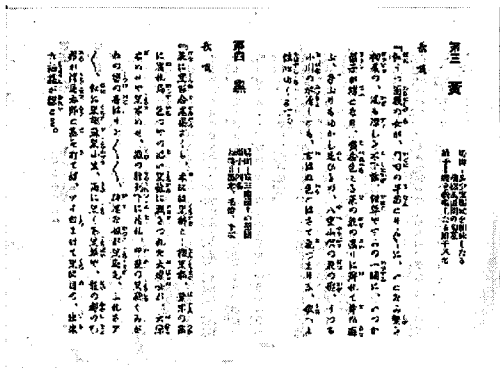


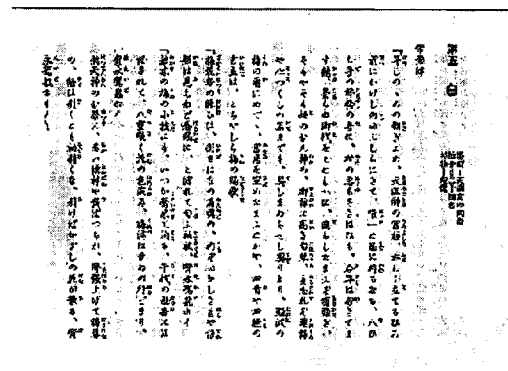
第十二回

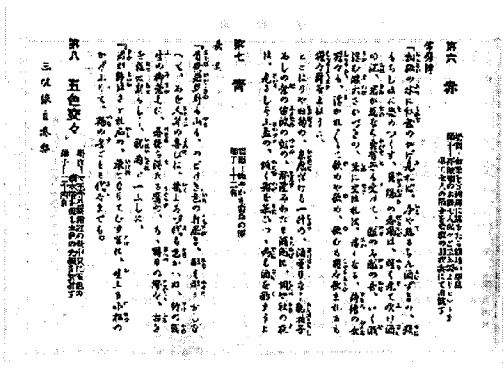


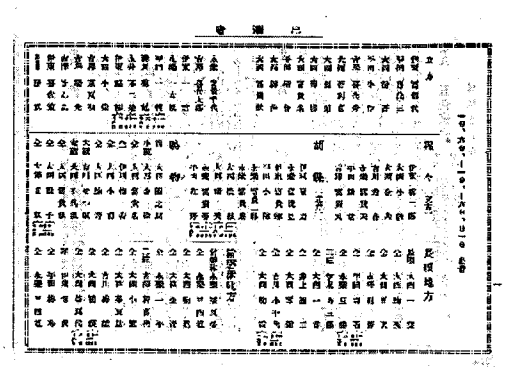


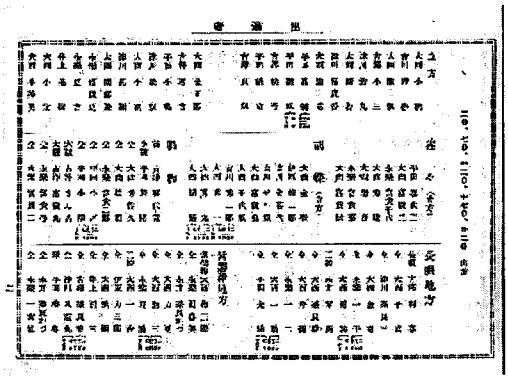


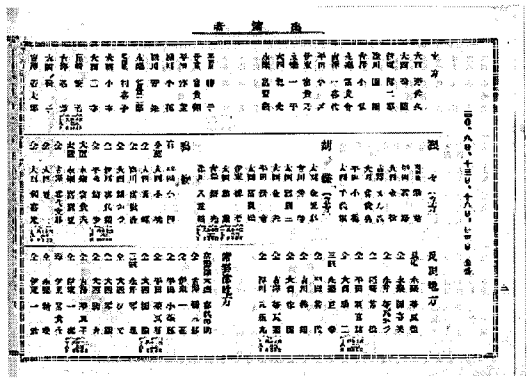


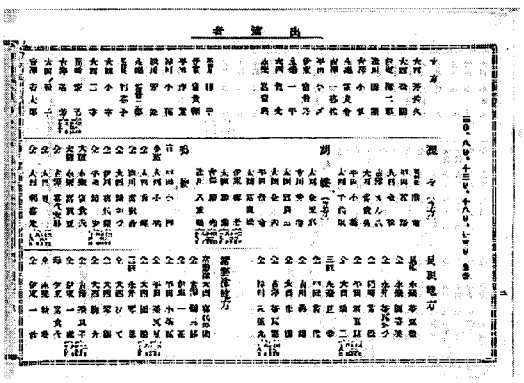


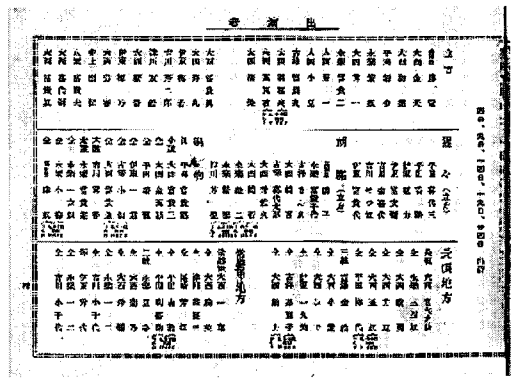


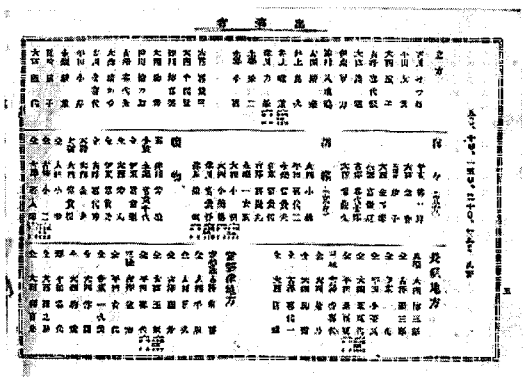


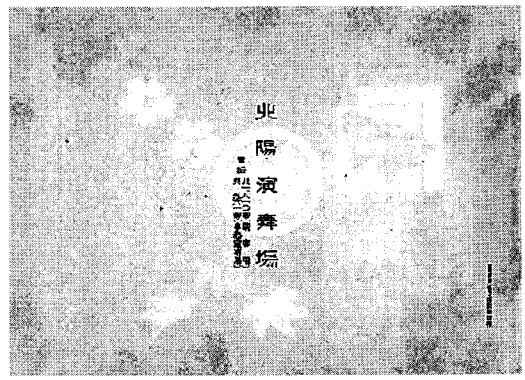


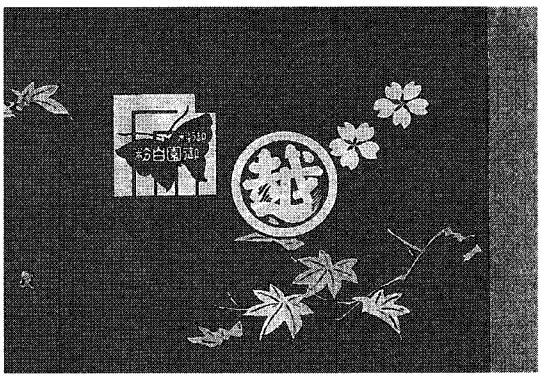








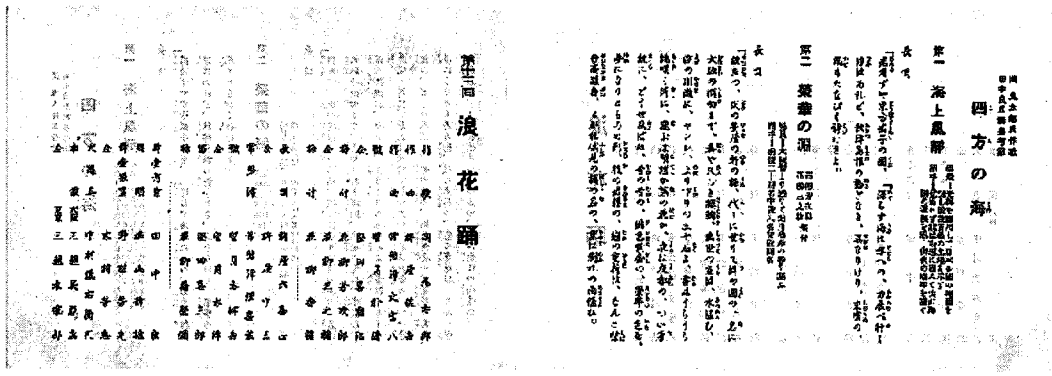

兆陽演舞場

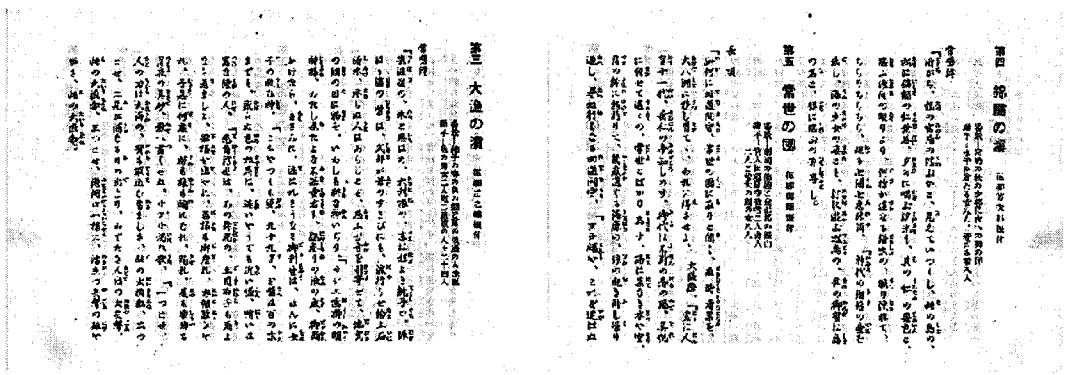


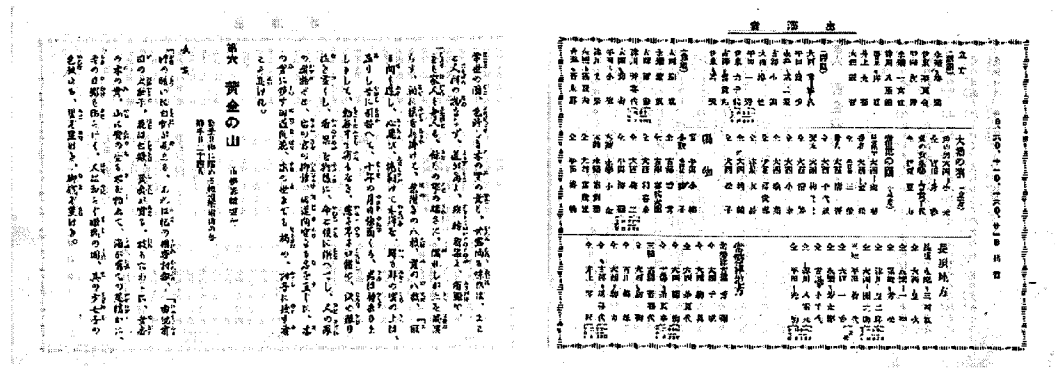
第十三回

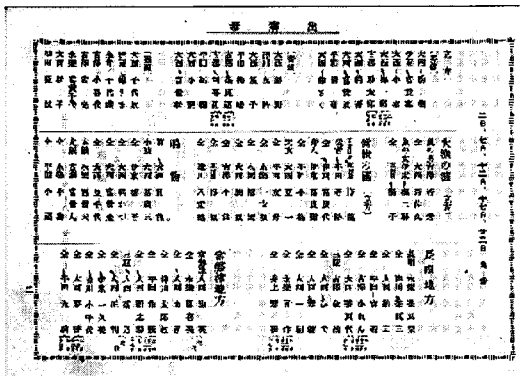
浪花おどり

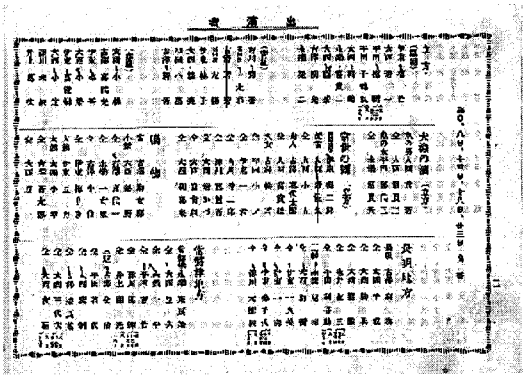
昭和二年
五月一日より
二十五日まで
午後六時より
四回開演

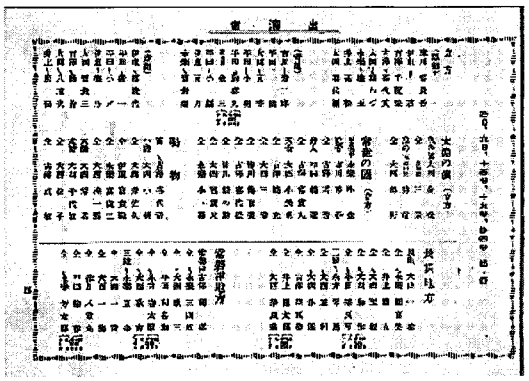

四方の海
第一　海上風靡
第二　葉桜の潮
第三　浪花踊

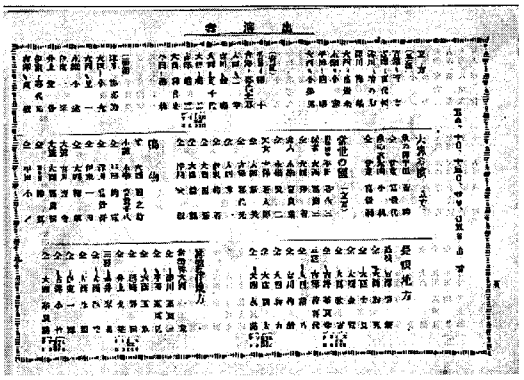

第四　錦屏の滝
第五　常世の国
第三　大漁の潮

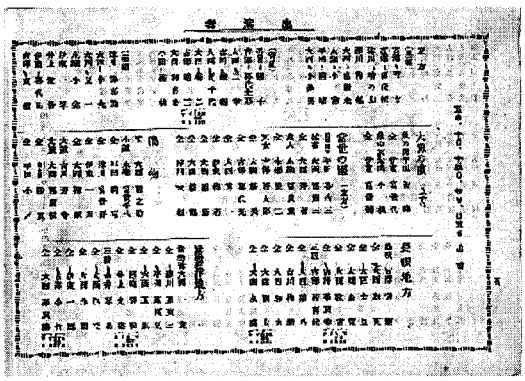

第六　黄金の山

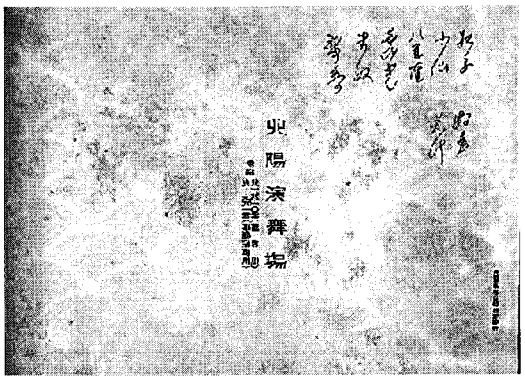


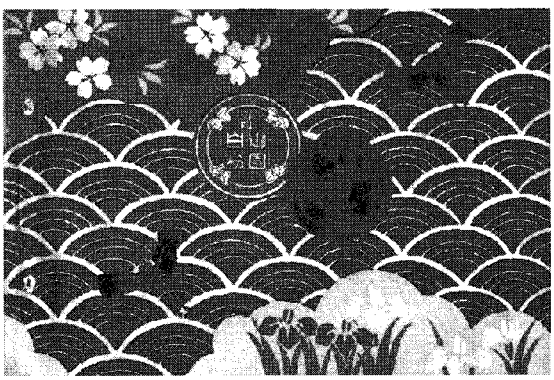




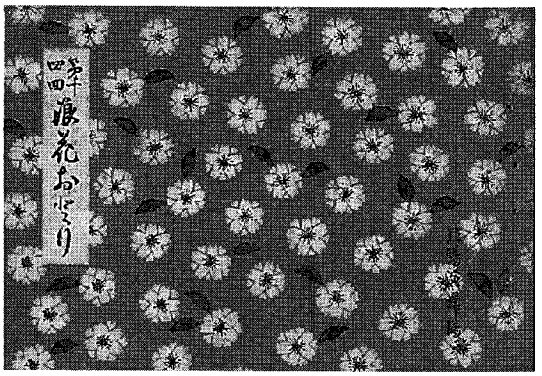


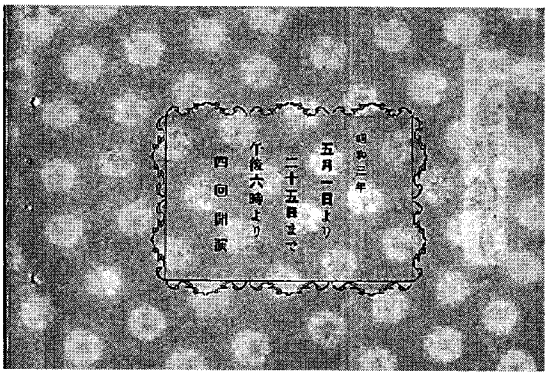


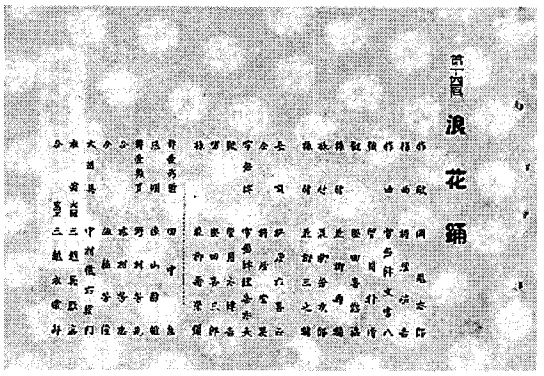

北陽演舞場

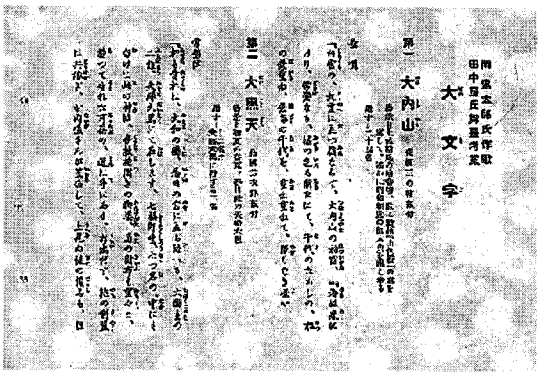


第十四回

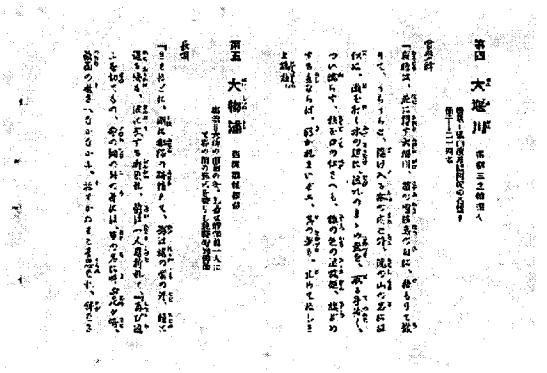

第十四回
浪花おどり

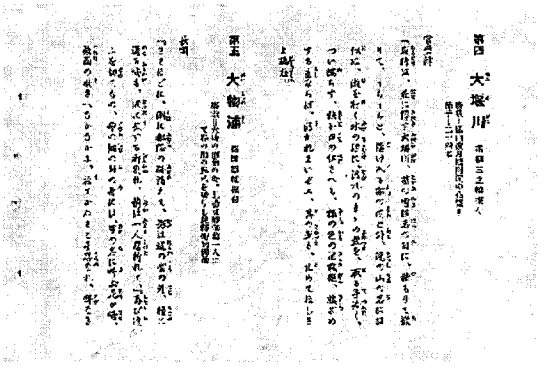

五月一日より
二十五日まで
午後六時より
四回興行

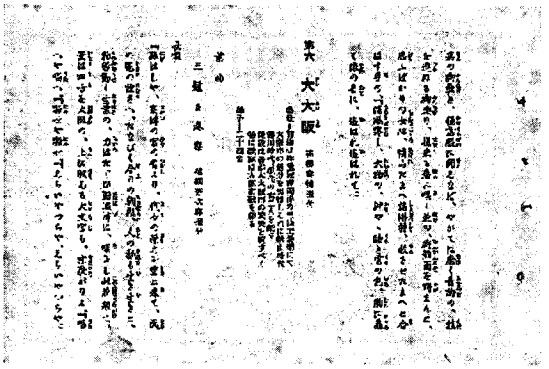

第十四回　浪花踊

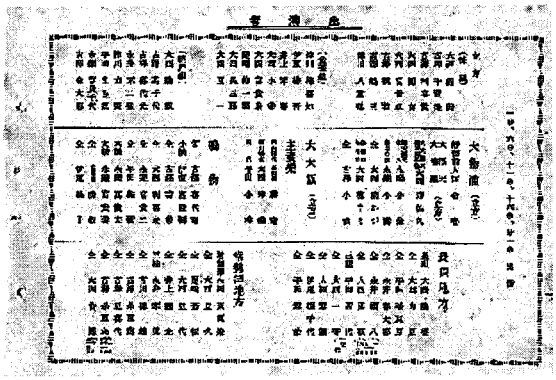

大文字
第一　大内山
第二　大黒天

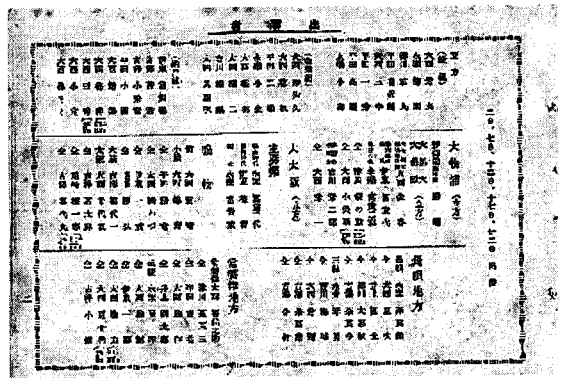
第三　大佛殿

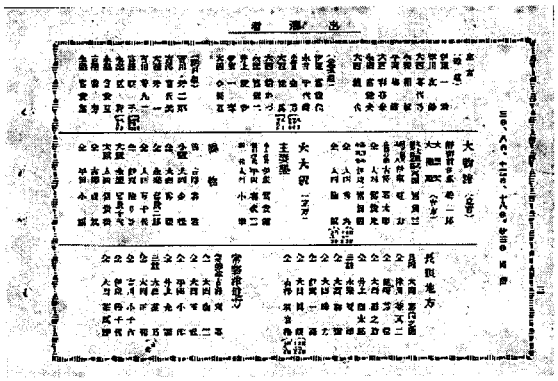

第四　大堂川
第五　大物浦

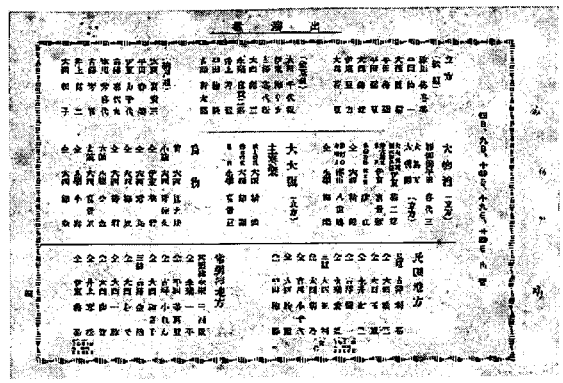

第四　大堂川
第五　大物浦

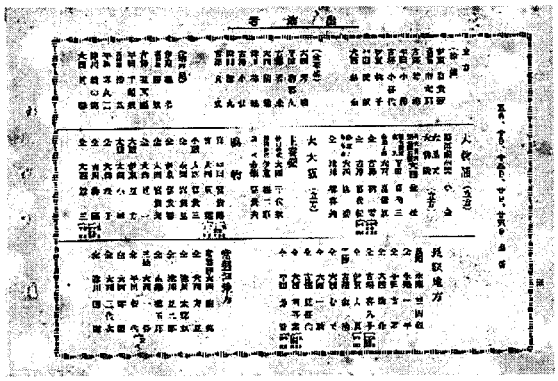

第六　大大阪

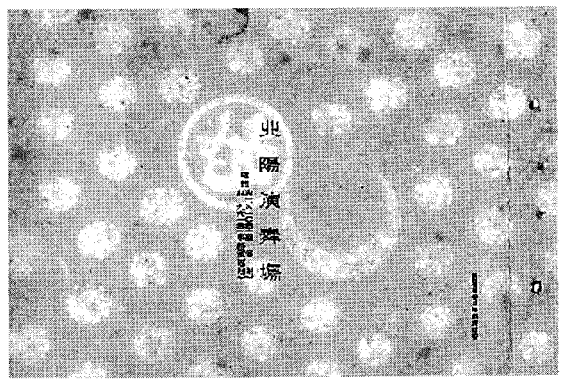


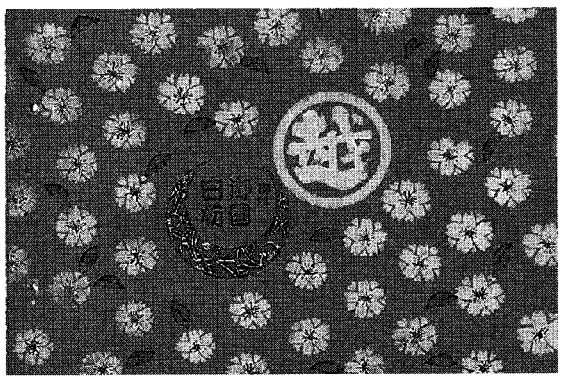




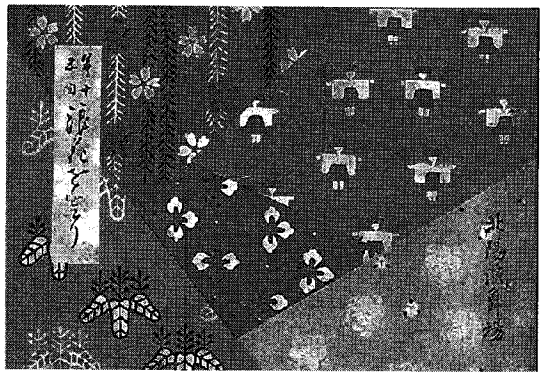


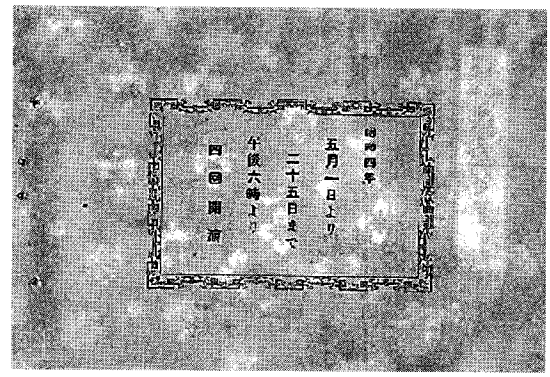


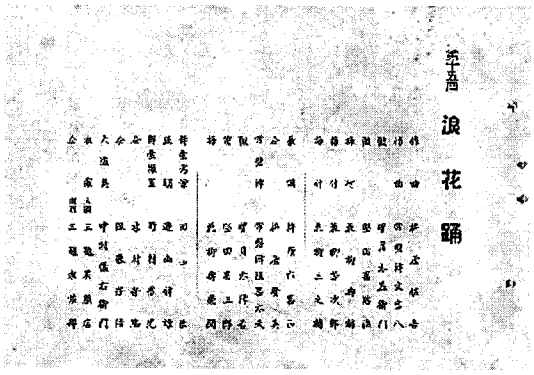

陽演舞場

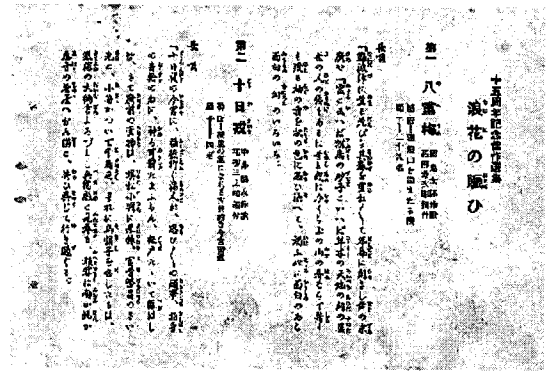


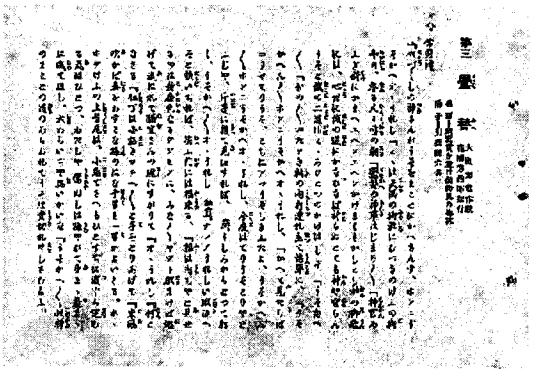
第十五回

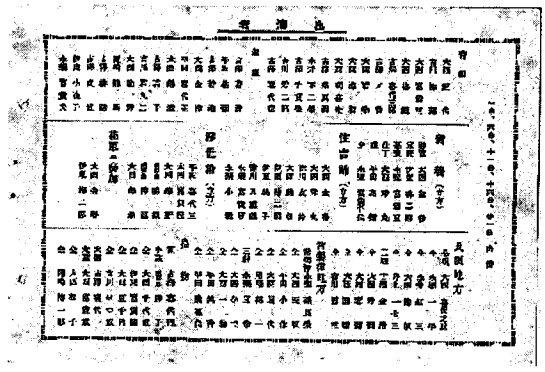


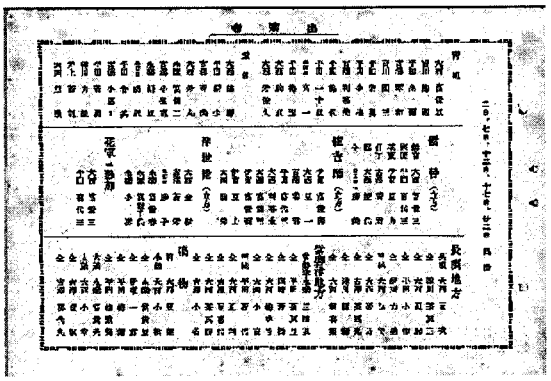

明治四年
五月一日より
二十五日まで
午後六時より
四回開演

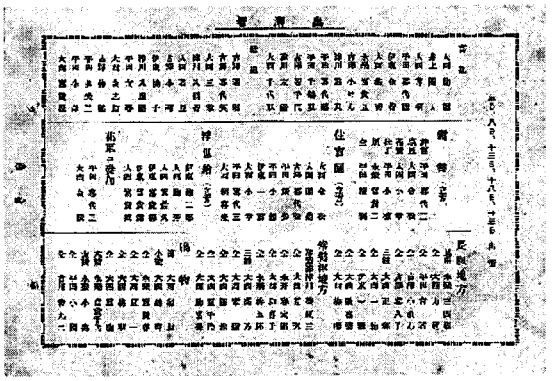

第十五回
浪花踊

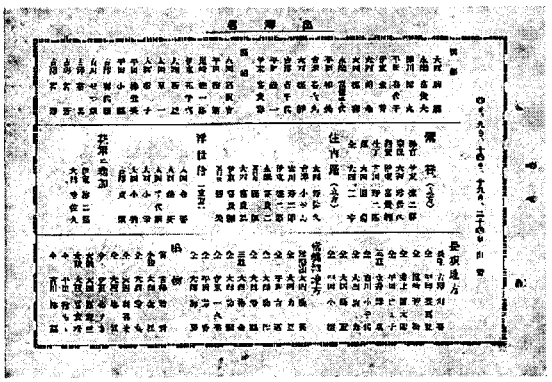

十五回記念出演作選集
浪花の賑ひ
第一　八重梅
第二　十日戎
第三　雲雀
第四　大阪城
第五　住吉踊

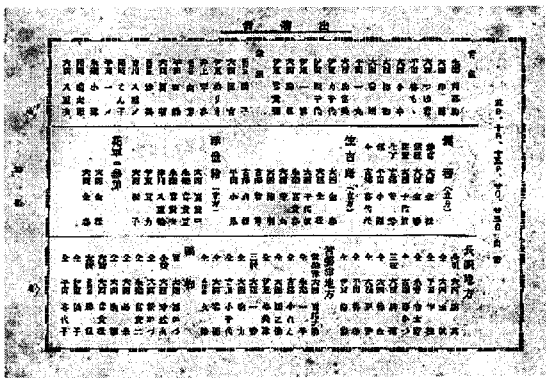

第六　浮世絵
第七　花軍

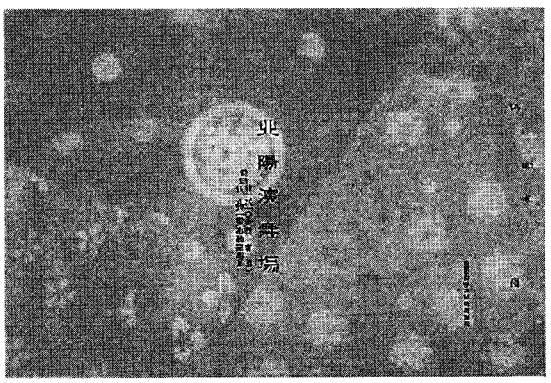

出演者
舞踊
住吉踊
浮世絵
花軍

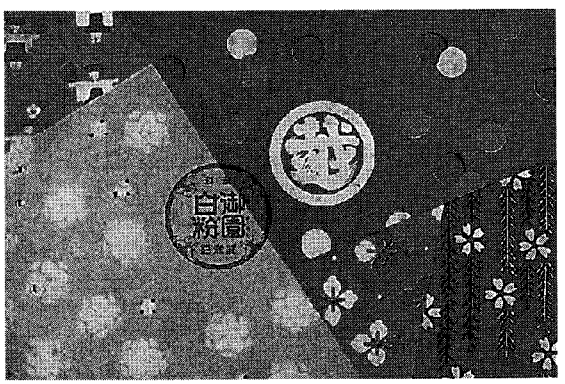












3．結び

今回掲載した番付史料は，表1に確認できるように番付の体裁が整い様式化される時期のものであった。第一回から第六回までの番付が，大きさ，形，頁数などそれぞれが大きく異なった体裁を持っていたのに対して，これは，浪花踊が当時の社会へ受け入れられその位置が出来上がり，大阪地域の春の行事として定着し安定した時期にあったことが窺われる。今回掲載した番付は，歴史的には大正10年から昭和4年までの，第一次世界大戦から日中戦争が始まるまでの花街の経済が安定し，大阪が大大阪と呼ばれた時期に公刊されたものである。表紙の絵柄は美しく，踊りの題材も華やかで，歌詞も美しい。加えて舞台美術に田中良が参加[1]し，大正13年に始まった花柳舞踊研究会との関係[2]も始まり，花街の一行事に止まらず芸術性を志向し始めた浪花踊や北陽演舞場関係

者の動きも見られる時期[3]である。これらの点に関しては，その指摘をするにとどめ，証左を経て別稿に譲りたい。

【注】

1) 名前の初出は，第九回浪花踊「第五　春日の歌垣」の舞台考案である。第九回番付一丁裏参照。その後，第十二回浪花踊より毎回，作詞者らと共に連名されている。第十二回番付一丁表参照。

2) 花柳壽輔の名前は，第十一回番付に振付顧問として初めて見られる。第十一回浪花踊番付三丁表参照。その後，第十二回浪花踊から振付が花柳壽輔に変っている。第十二回浪花踊番付一丁表参照。「毎々述べた様に東京に於て展開した新劇，新舞踊運動は此頃に至つて，益々隆盛を極め，藤蔭会や花柳舞踊研究会の創作発表も可成り其意義と価値とを認められて，可否を論じられる声も大きくなつてゐた時なので，北陽は其振付けを花柳寿輔氏に依頼した」田中良『舞台美術』昭和19年，西川書店，p. 102。

3) 吾々は又々此娯楽物たる浪花踊に対しても何等かの文化的向上への意義を付加すべきだと云ふ希望を持つて善処したくなり，次第に質的水準を高める為めの道楽気を盛り込む様になつて，研究会に於て実験済みの新舞踊形式迄盛り込むで（以下略）舞台も愈々道楽気たつぷりで相等壺にはまり，演技者の実力も永い本格的修練の結果上達して浪花文化の一翼たらむとしつつ有つたが」田中良前掲書，pp. 102－103 。

付表 1

浪花踊簡易版番付内訳

回数	本の大きさ	表　紙	公演期間	歌詞	番　組	衣装説明	場面解説	広　告	抹茶手前	裏 表 紙	総 頁 数
第一回	12.0×18.5cm	あり（一部）	不明（破損）	3頁	28頁	なし	なし	あり(1.5頁)	なし	あり（付広告）	表、32頁、裏
第二回	10.7×15.4cm	あり（浪花踊）	5,1－21,6時(4回)	3頁	4組(4頁)	写真	なし	あり(3頁)	なし	あり（付広告）	表、12頁、裏
第三回	12.5×18.5cm	あり（浪花踊）	5,1－21,6時(4回)	3頁	4組(4頁)	あり	なし	あり(2頁)	なし	あり（付広告）	表、10頁、裏
第四回	12.0×12.0cm	あり（浪花踊）	5,1－21,6時(4回)	4頁	4組(8頁)	2頁半	3頁半	あり(2頁)	なし	あり（付広告）	表、20頁、裏
第五回	12.0×12.0cm	あり（浪花踊番組）	5,1－21,6時(4回)	7頁	5組(10頁)	2頁	5頁	あり(2頁)	なし	あり（付広告）	表、26頁、裏
第六回	12.6×18.3cm	あり（浪花踊）	5,1－21,6時(4回)	3頁	5組(5頁)	1頁	3頁	あり(2頁)	なし	あり（付広告）	表、14頁、裏
第七回	12.6×18.3cm	あり（浪花をどり）	4,1－21,6時(4回)	4頁	5組(5頁)	1頁	4頁	あり(2頁)	なし	あり（付広告）	表、16頁、裏
第八回	12.6×18.3cm	あり（なにはをどり）	5,1－21,6時(4回)	4頁	5組(5頁)	1頁	4頁	あり(2頁)	なし	あり（付広告）	表、16頁、裏
第九回	12.6×18.3cm	あり（浪花踊）	5,1－21,6時(4回)	5頁	5組(5頁)	なし	なし	なし	なし	あり（付広告）	表、10頁、裏
第十回	12.6×18.3cm	あり（浪花おどり）	5,1－21,6時(4回)	5頁	5組(5頁)	なし	なし	なし	なし	あり（付広告）	表、10頁、裏
第十一回	12.6×18.3cm	あり（浪花おどり）	5,1－25,6時(4回)	5頁	5組(5頁)	なし	なし	なし	なし	あり（付広告）	表、10頁、裏
第十二回	12.6×18.3cm	あり（浪花踊）	5,1－25,6時(4回)	5頁	5組(5頁)	なし	なし	なし	なし	あり（付広告）	表、10頁、裏
第十三回	12.6×18.3cm	あり（浪花おどり）	5,1－25,6時(4回)	5頁	5組(5頁)	なし	なし	なし	なし	あり（付広告）	表、10頁、裏
第十四回	12.6×18.3cm	あり（浪花おどり）	5,1－25,6時(4回)	5頁	5組(5頁)	なし	なし	なし	なし	あり（付広告）	表、10頁、裏
第十五回	12.6×18.3cm	あり（浪花をどり）	5,1－25,6時(4回)	5頁	5組(5頁)	なし	なし	なし	なし	あり（付広告）	表、10頁、裏
第十六回	12.6×18.3cm	あり（浪花をどり）	5,1－25,6時(4回)	5頁	4組(4頁)	なし	なし	なし	あり(初出)	あり（付広告）	表、10頁、裏
第十七回	12.6×18.3cm	あり（浪花をどり）	5,1－25,6時(4回)	6頁	5組(5頁)	なし	なし	なし	あり	あり（付広告）	表、12頁、裏
第十八回	12.6×18.3cm	あり（浪花踊）	5,1－25,6時半(4回)	5頁	5組(5頁)	なし	なし	なし	あり	あり（付広告）	表、12頁、裏
第十九回	12.6×18.3cm	あり（浪花踊）	5,1－25,6時半(4回)	5頁	5組(5頁)	なし	なし	なし	あり	あり（付広告）	表、12頁、裏
第廿回	12.6×18.3cm	あり（浪花踊）	5,1－25,6時半(4回)	5頁	5組(5頁)	なし	なし	あり(1頁)	なし	あり（付広告）	表、10頁、裏
第廿一回	12.6×18.3cm	あり（浪花踊）	5,1－25,6時半(4回)	5頁	4組(8頁)	なし	なし	あり(2頁)	あり	あり（付広告）	表、14頁、裏
第廿二回	12.6×18.3cm	あり（浪花踊）	5,1－25,6時(4回)	5頁	5組(5頁)	なし	なし	あり(2頁)	なし	あり（付広告）	表、10頁、裏
第廿三回	12.6×18.3cm	あり（浪花踊）	5,1－25,6時半(4回)	6頁	5組(5頁)	なし	なし	あり(2頁)	あり	あり（付広告）	表、12頁、裏